

人間の轉換的本質について

篠

憲

二

直立化としてのアウストラロピテクス革命

ルロワ・グランが「最近二十年のアウストラロピテクス革命」⁽¹⁾と評したとき、それは古人類学の研究史における一九五〇年前後の画期的な進展を言い表わすものであった。それまでは、人類の起源をなす根本的な特質は脳頭蓋の大きさにあり、人類は脳の増大化に先導されて進化してきたということが、根づよく信じられてきた。しかし、ヒト科アウストラロピテクス属は解剖学者をも困惑させるほどに小さい脳をもちながら、その大後頭孔の位置、骨盤や下肢骨の骨組から確定されるように、基本的には現代人と同様に直立していたのである。脳頭蓋の構造が直立した脊柱を支えられることによつて生態的、力学的な拘束条件から解放され、やがて二次的に——ヒト属にいたつて、おそらくは言語や道具によりいっそう媒介された複雑な共同生活や豊かな食生活とともに——拡大し充実したということになる。こうした人類観の轉換としての「アウストラロピテクス革命」は、そのまま同時に、ヒト科としての人類が類人猿（ヒト上科のうちオランウータン科の通称）から分かれることになった「直立革命」そのもの、言い表わす術語として捉えなおすことができよう。アウストラロピテクス革命としてのヒト化（hominization）、それは持続的な直立姿勢の獲得としての直立化にほかならない。そして、人間はすべて乳児（生後一年間）から幼児

人間の轉換的本質について

への移行期に、まさにその移行的転身として、こうした原直立化を新たに反復しなければならぬのであり、事実、五百万年にわたって反復してきたのである。

ちなみに、人間の個体発達におけるこうした身体の直立化が喚起するきわだつた自立や独立の印象とその表現は、古来——孔子の「三十而立」という述懐が示すように——精神の水準にも類比的、高進的に転位している。それを人間の「第二の直立化」あるいは「第二の直立革命」と名づけることができるかもしれない。実際、カントは理性的精神の自立的成熟としての啓蒙(Mündigkeit, Aufklärung)を「自ら思考すること(Selbstdenken)」という格率に集約し、それを「人間の内面における最も重大な革命」であると称揚しつつ、「人間はいまや経験の地盤のうえを自分の足で立つて……前進する」と述べるのである。ところでまた、自ら思考すること、自ら生きること(Selbstleben)として卓示されるこうした個人の精神的な自立化は、枢軸時代とも呼ばれる紀元前五百年前後に生じた人類精神史におけるきわめて深甚な変革——原生的な社会や文明や生活への集合的帰属から離脱しつつ、個人格的な自立性と普遍的な合理性への道をひらいた宗教・倫理・哲学的な精神革命——のうちに、その歴史的な原型を有している。したがって、今日における理性的、実存的な自立への自己責任の課題もまた、精神のこの原革命を反復しなければならぬことになる。三千年の人間精神の歴史を自らにひき受けつつ現在の状況のうちに立つのではない者は、未熟かつ蒙昧(unmündig, unaufgeklärt)にとどまる、と言われるゆえんである。

直立位を基盤とする器官機能の特質

さて、*homo stans* (直立する人) というべき人間の直立姿勢を基盤にして、相関的・相乘的に機能し発達するいくつかの器官特質の系が形成されるが、それを概観しておこう。まず第一に、大後頭孔を中央にうつして直立の脊柱——もちろん固有に進化した彎曲をともなっている——に支えられた脳頭蓋は、大脳半球とくにその前頭葉の容量と構造を、したがって知的表象意識の能力をいちじるしく発達させることになった。つぎにまた、直立位になんらかの程度でむすびついた顔面の力学的解放、犬歯の退化、喉頭の沈下などによって、口腔や咽頭腔は空間的・運動的な自由度を増大させ、人間的言語の基盤となるゆたかたで明瞭な音声的可能性をひらくにいたった。さらに、歩行機能から解放されて自由になった前肢の手と指は、道具を使用し製作する技術能力を獲得したのである。こうした知的意識、言語、道具技能の卓越した機能意義は、伝統的に言いならわされてきた人間の定義——*homo sapiens* (知る人)、*homo loquens* (語る人)、*homo faber* (工作する人)——ともよく合致しているといえよう。

人間に固有の機能特質としてのメタ機能とプロ機能

ところで、それらの機能特質が人間を動物から区別するのは、たんに程度的な差異によってではなく構造的な差異によってである、ということに注目しなければならない。人間における表象意識や言語や道具技能は、動物における程度の低い類似の機能のように、外界や他者への対象的な志向関係を遂行するだけにはとどまらないからである。つまり一方では、意識は対象を表象する意識自身を反省的に表象し、言語は生活状況のなかで伝達的に語る言語自身を主題的に語り、道具技能は対象志向的に使用される道具自身を製作することができる。そこには、三つの機能のそれぞれに、対象を志向する第一的な基本機能をこえて、自らの機能自身に再帰的に関係し、その自己関

人間の転換の本質について

係をさらに累進的に産出していくような、高次のメタ機能の開放的な構造がひらかれているのである。

したがって、逆にいえば、たとえば運動や知覚、欲求や感情といった、それ自身のうちにメタ構造を内包していない機能は、高等動物のそれと連続的であることになる。そのかぎりでは、一般に、人間と動物はそれらの身心機能の一次的な内容のうえでは連続しており、機能の二次的な構造のうえでは断絶している、と言うことができよう。しかしまた、人間においては、たとえば欲求や感情も知性によって自己理解され自己制御されるように、いかなる心的機能も、可能的には知性の統合的なメタ機能のもとに包摂されている。そのかぎりでは、たとえば感情の具体的な様相において、動物は人間よりもつよく怒り悲しむことはあっても、人間よりもふかく怒り悲しむことはない——それらを知性的に抑制して内向させることがないのだから——、と言うこともできよう。

このように他の諸機能をも自己包摂しうる知性のメタ機能にかんして、ふりかえって付言しておこう。さきを示唆されたように、たしかに、言語や道具に媒介された生活の必要や成果が、ふだんに知能の発達をうながしていくことになるだろう。しかし、それと同時にまた、言語や道具技能のメタ機能的な発展には、それらを理解し洞察する知性のメタ機能がつねに先導的に浸透している。したがって、知性の普遍的かつ統合的なメタ機能力こそは、人間に特質的にそなわる諸機能の相乗的な発達系において、まさにその中枢点をなすものなのである。

また他方では、高次のメタ機能とは反対の低次方向に、つまり志向対象に直接とりくむ基本機能のてまえに、潜

在的に作動するような機能契機がみいだされる。事物を表象する知覚意識は、相対的に分節され分立されうる感覚を——知覚にかんする哲学的・反省的な分析が、不適切ながらくりかえし示してきたように——その機能成素として³⁾いる。言語の意味志向的な活動はその表意的な最小単位である記号素を、それよりも下位次元の潜在的な機能要素、もはや意味をもたない弁別的な最小単位である音素から構成している。そして、対象的作業にむかつて使用される道具は、その機能や構造のために適合的に選択されたさまざまな素材物質によつて組みたてられている。いづれの場合においても、対象志向的な第一次機能のてまえに、それが存立し遂行されるための前提条件として、その機能を構成しないし支持しつつそれに統合されているような、基底的な機能成素の層、潜在的なプロ機能の層が形成されているのである。

こうした観点からふり返るならば、いわゆる動物の道具や言語や意識とみなされるものは、もつぱら対象志向的な活動にのみ固着しており、基盤的に形成されるプロ機能や高進的に開かれるメタ機能を統合した重層的な構造体制を有してはいない、ということが確認されるだろう。それに対して、先史時代の最古の示準遺物である石器（燧石を剝削したチョッパー）でさえ、硬質素材からなる打撃用の石器（道具を製作するメタ道具）によつて加工された切り刻み用の道具である。また、有史時代の最初期の碑文にしるされた文字は、音声言語の機能単位（語や音節や音素）にかんするメタ言語的な要素分析にもとづいて、二次的に形成された表意文字や表音文字である。したがつて、両者ともすでに、三重の機能複合態による、そうした機能複合態の凝集としての所産なのである。

文明進化の推進力としてのプロ機能とメタ機能

人間の特質的な機能にそなわろうとしたプロ機能とメタ機能の複合的な共働、さらには両方向への開放的な威力

人間の転換の本質について

は、人間の文明進化の構造的な推進力となっている。たとえば道具や言語のプロ機能体（プロ機能を潜在させる素材や媒体）を例にとれば、道具にとつての素材の革新的な創出が、石器時代、青銅器時代、鉄器時代といったふう

に、人類の古代文明史の画期を形成しており、また、言語の表現媒体における音声から文字への革新が、先史時代から有史時代を分かつ指標となっている。このように、道具の素材や言語の媒材、さらには動力のエネルギー材といったプロ機能体は、文明基盤の水準を規定しているのである。

もつとも、そうしたプロ機能体を革新させていくのはプロ機能それ自身ではなく、たとえば今日の新素材の開発研究からも分かるように、やはり知性に先導された言語や技能の統合的なメタ機能である。というのも、知的意識のメタ機能はたんに第一次の対象志向的な機能に再帰的に関係する、あるいは先行するメタ機能に累進的に関係するだけではなく、自らが一契機として属する機能連関を、さらには諸特質の複合的な機能連関をも反省的に対象化し、その諸契機や連関形態を変革させうるからである。そのようなわけで、プロ機能—対象志向的機能—メタ機能の全連関におよぶ知性的メタ機能の普遍的な革新力は、そのつど事実上の限界を有するとしても、原理上は、どこまでも限界を超出する累進過程にひらかれている。こうした累進的革新のほとんど自律的なダイナミズムによつて変遷していく歴史社会の生活様式、そこで固有に形成される技術や言語や知識や行動型は、もはや身体器官のうち

に内的に生得化されたものとして遺伝されることはない。それらは、それぞれの世代と個人がつねに新たに、ますます累積的にますます加速的に習得していかなければならないのである。人類は身体器官としては、その直立位にしても脳容量や四肢形態にしても、すでに——ルロワ—グランは百万年前からと推定する——進化の飽和点に達している。それにもかかわらず、あるいはそれゆえに、人間は、そして人間のみが、全生物の進化様式から離脱し、生物進化の次元から文明進化の次元へと転進したのである。

人間の器官機能の外化形成としての文明

道具と言語が、身体にそなわる器官機能と意識機能を外在的に措定し、客体的に構成したものであることは、それらを言い表わすギリシア語の両義性にもよく示されている。道具 (organon) は第一の器官 (organon) であり、手はオルガノンのオルガノン (ὄργανον ὄργανον)⁽⁴⁾、諸々のオルガノンを使用し製作する原オルガノンである。また同じように、言葉 (logos) は第二の理性 (logos) —— トマスにしたがえばまさに内なるロゴスにたいする外なるロゴス —— であり、思惟はロゴスのロゴス、諸々のロゴスを語り聞く原ロゴスである、ともいえよう。言語は世界を分節的に命名しつつ、相互人間的な意思伝達の媒体となり、道具は自然世界を分解的に加工しつつ、社会的な生活需要を相互媒介的に充足させる。したがって、両者はともに人間の対自然関係と対社会関係の結節態であり、まさに人間の第二の身体 —— さらに強調していえば第二の社会的身体 —— として、高進してやまない世界関係を媒介し遂行する機関となっている。このように、人間が自らの器官と意識の機能を投射的に拡張し外在的に構築する、その活動と所産、しかも歴史社会的な集合性において推進する、その蓄積と革新、それが文明というものを形成することになる。生物進化の飽和状態のもとにあつて、その特質的な機能にはらまれた構造的な開放可能性をそのつど自己疎外的に実現 (realisation) し物象化 (reification) していくということ、内圧的にそうせざるをえないとともに自発的にそうなしうるということ、そこに人間の宿命的かつ自由な文明的本性が存するのである。

自らの潜勢的な本質をそれ自体においてではなく、外部に転移し対象的に構成することによって実現する、という人間の自己疎外的な本性は、たとえば神の本質は人間の本質の對象化である⁽⁵⁾ というフォイエールバッハのテーゼによって鮮やかに示されている。そのように、人間がその形而上的な精神本質を神として疎外的に形成し、そのもとに信仰的に服したとすれば、その形而下的な器官本質はこれを機械として疎外的に形成し、そのもとに労働的に

服する、と言うことができよう。そうした意味では、機械は近代人の形而下的エートスにとつての神なのである。いづれにおいても、人間はその可能的本質の最高の実現、つまり全能的な実現——全能性への願望は、人間に固有の生初のへ寄るべなき（*Un-tilförsäktad*）と開放的な潜在力とに両面的に動機づけられている——を希求し、それを対象的に措定し、その威力に従属してやまないように思われる。実際、こうした構造的な類比性のうちに、自己疎外の問題が一九世紀以来——現実的にも思想的にも——宗教論から労働論へ転位するゆえんが存しているのである。

身体の機能契機の外在化過程… 道具から機械へ

このような原理的な論定をただ主張するだけにとどまることなく、さらに実際の事態についてその具体相を確認していかねばならない。以下では、人間の第二の身体が道具から機械へどのような外化・構成されていくかを辿ってみることにしよう。そこには、身体の器官と意識のいくつかの機能契機——あらかじめ標示しておけば、器官、動作、動力、知覚・運動的調整、知的判断といった契機に分節される——が、しだいに段階的に外在化されていく過程がみてとれるのである。

(一) 道具——手のおぶしで打つことが打撃用石器や金槌に、指ではさむことが箸やペンチやピンセットに転移されるように、道具は身体器官（主として手指）にじかに接続され、その調整された動力と動作を増強しあるいは精確にしつつ、一体的に遂行する。道具によって、器官そのものが外部に延長的に構成されたことになる。

(二) 機具（手動機械）——手織機や自転車のような機具においては、手足の調整された動力や動作がその機具に连接的、持続的に伝えられるが、対象に直接にかかわる作業をするのは、機具に固有にしかけられた動作（回転

運動や上下運動)である。対象的作業を遂行する主たる動作契機が——器官契機とともに——、外部に組みたてられた装置のうち在外在化されたことになる。⁽⁶⁾

(三) 機械——紡績機や自動車といった機械になれば、原動機—伝動機—作業機という自律的な機械体系が構築され、それが自動的に作業をするようになる。人間は始動や停止の切り換えをするだけ、あるいは作動の状態や方向を調整するだけであり、身体の器官と動作と動力が作業機と原動機として完全に在外在化されたのである。

(四) 自動機械——発達をとげた高度の例として、ミサイルや産業用ロボットなどをあげることができよう。ここでは、作業システムと動力システムにさらに自動制御システムが合体させられている。コンピュータを導入したフィードバック制御によって、センサーが機体の姿勢や作動方向を誘導あるいは修正し、それによって生じる作業状態の変化にプログラムが即応しうるようになっていく。身体の知覚—運動的な制御機能の契機が、機械的に特殊化され精密化されながら、物理的に構築されているのである。

(五) コンピューター機器——今日の水準でいえば、マイクロエレクトロニクス革命と呼ばれる、超高度に集積された電子回路によって構成された、知能的な機能を遂行する装置であり、たとえば数理分野の高速演算のための電子計算機、医学分野の診断治療のためのコンサルテーション・システムなどがある。こうして、演算、推理、記憶、認知といった大脳の中樞神経系の知的機能に類似した情報処理機能が、電子工学的な装置として構築されたことになる。ちなみに、これらの機器は力学的な機械運動をするものではなく、電子的な情報処理をその作業課題としている。しかし、こうした装置をくみこんだ知能ロボット(たとえば火星探査ロボット)は、器官や動作から知覚—運動的制御や知能にいたる身心機能の全契機を外在化した、文字どおりの第二の身体を——もちろん、機械的に極度に一面化された、しかし高精度に技能化された機能相似性(いうまでもなく機能相同性ではない)において

——達成したものとなっている。

以上かんたんに通観されたように、太古の打製石器から現代のコンピュータ機器にいたる技術の進展は、人間の身体に統合されていた諸機能とその諸契機をしだいに分節的に外化し形成していく文明的な革新の過程である、と見ることが出来る。そこには、身体の人間学的な機能構造にしたがって展開されていく、一つの必然的な定向発達といふべきものが存在している。その歩みは、そのつどの歴史・社会的な諸条件の錯綜のもとでさまざまな遅速あるいは曲折を示すことになるとしても、文明的に大観すれば、そうした人間学的定向性ないし人間学的必然性によって貫徹されているのである。外化し形成に内在するこのような展開論理からすれば、コンピュータ機器にまでいたりついた進展過程は、基本的にはすでに最終段階に達しているように思われる。そして、このことに含意されもし、このことを証示しもある、つぎのような事態にも注目しておかなければならない。すなわち、この最終段階においては、*homo faber* (道具技能) だけでなく *homo loquens* (言語) や *homo sapiens* (知能) さえも、つまり直立性にもとづく人間の固有特質である機能系のすべてが、電子的・情報的な工学技術のうちに——もちろん工学技術によつてのかぎり、大規模かつ高性能の *imago hominis*、いわば *super-homo* として外化された *imago hominis* の創出にむけて——総合的に掌握されるにいたった、あるいは掌握されはじめたのである。

現代の文明的状況の両義性

このように、人間の技能系にかんする外在化過程の完成は、同時にほかの機能系をもすべて自らに集中し統合することによって、文明性の構造性格を終極的な局面にもたらしめているように思われる。人間の生物進化が構造的な飽和点に達しながら、そのご文明活動や人口の爆発的な増大をひき起こしてきたように、それと類比的に言いうると

すれば、文明進化が構造的な飽和水準にいたつたとしても、そのこの推移については見きわめをつけがたいであろう。たとえばコンピューター機器のプロ機能体となるシリコン半導体とその集積回路のすさまじいまでに加速化する開発——もつとも、その加速性とともにはやくも、半導体素子の加工技術をになうレーザ―光の精度限界が予見されている——や、ネットワークのメタ組織であるインターネットの急速に広域化し普及化する創出といった、いわば技術爆発をまのあたりにしながら、われわれは、文明の飽和段階にはじまる終末的爆進的な両義的状况のうちに立っているのかもしれない。

生活世界の領有化過程 … 新石器革命から産業革命へ

ところで、道具や機械は、身体機能と環境世界とが作用的に關係するさいの媒介者であり、その結節態となっている。つまり、遠心的投射的には、器官的技能を拡張する外在的な構成であり、それと同時に、求心的包摂的には、環境世界をわがものとして獲得し使役する領有的な内在化でもある。前者は後者をすでに前提しながらも、それをさらに完遂していくことになる。というのも、一定の身体技能を道具として物質のうちに構成するためには、その材料となる物の性質や効率、その道具が作業対象とする諸物の用途など、一般に、生活環境とそこに潜在する使用可能性について知識技術的に了解していなければならないからであり、製作された道具はそうしたことを實際に遂行していくからである。したがつてまた、身体の機能系の物質的な外化形成の段階と環境世界の知識技術的な領有化の段階は、相互的相関的に進展してきたのである。ここには、人間と環境世界が相互に同一化しあつていく段階的な過程、その弁証法的な契機としての機能外在化と環境内在化の相互促進が存在するように思われる。そのような観点から事態を具体的に確認するために、つぎに、新石器革命と産業革命によつて大きく分かれたる人類

の文明史の段階について、その基本様相と進展動向を概見しておくことにしよう。

(一) 旧石器時代——旧石器人は手の延長としての道具(木器、打製石器、骨角器)によつて野生動物を狩猟し、野生植物を採取していた。その後期(三万五千〜二万年前)に描かれた図像の対象主題に示されているように、とりわけ野生動物に対して圧倒的な生活関心がそがれていた——ルロワ・グランの記載にしたがえば、洞窟にえがかれた壁画と実用品や装飾品にえがかれた動産画の全体のうちで、記号(性シンボル)一五%、人物(男、女)六・五%に比して、動物(馬、野牛、山羊、トナカイなど)は七三%以上を占めている——。マドレーヌ期(前一万三千年前後)のラスコーやアルタミラの洞窟壁画は、そのごもはや凌駕されえないような動物の始源的な生命存在感を表出している。その生態や行動や形態において熟知され、手と石器で直接に立ちむかわれ、食料として獲得され、象徴として表現された野生動物——それも、おおきな群をなして躍動し疾駆する野馬、野牛たち——、こそ、野性の身体とその延長たる獵具をつうじて相關的に内化された、旧石器人にとつての環境世界の主題焦点なのである。

(二) 新石器時代——この時代についてのヨーロッパ的理念型としては、磨製石器、農耕、家畜、土器の出現が指標とされる。とりわけ農業による採取経済から生産経済への転換、したがつて自給自足の定住生活への転換が、社会文明史における画期的な意義から新石器革命とよばれることになる。穀物農業——根栽農業ではなく麦作農業(エジプト、メソポタミア)や雑穀農業(インド、中国)が、古代高度文明の成立地盤となつた——を例にとれば、そこでは、人力道具である掘棒や鍬からやがて(前三千年頃)畜力機具である犁や播種機に移行する。穀物栽培とそれにとまなう家畜飼育は、こうした道具や機具を介して大地や水系、気候や季節、作物や家畜についての観察や試用の知識、育成や管理の技術を習得させ、まさに自然の生態系を自らの生活世界とするにいたつた。こうして、新

石器人の環境世界の主題焦点は、一般に動物から植物へ、野生から栽培・飼育へと転化したのである。ちなみに、こうした栽培・飼育は、おそらく人間の育児エートスにふかく根ざして会得されながら、しかも、それ自身が農耕エートス (ethos culturae) として人間性の育成である文化 (cultura) の基盤となったのであろう。

(三) 工業化時代——農業社会から工業社会への転換を推進した産業革命は、一八世紀後半から一九世紀前半のイギリス産業革命を例にとれば、機械動力としての蒸気機関の発明による工業の機械化をその中軸としている。紡績業への蒸気機関の導入は、家内制手工業を工場制機械工業へ移行させ、それとともに工業都市化、人口と賃金労働者の急増、農村や家族の共同^{グライゼンシャフト}体構造の崩壊といった広範な社会変動をひき起こした。また、石炭鉱業や製鉄業へのその導入は、石炭(エネルギー材)と鉄(原材料)という機械工業の基盤たるプロ機能体の生産を飛躍させた。さらに、機関車へのその導入は、鉄道網による交通運輸の完成(交通運輸革命)、したがって産業体系の完成をもたらしたが、それと同時に、蒸気力機械による蒸気力機械の生産という機械生産のメタ構造をも完成させたことになる。こうして、いまや自然の生態系から完全に離反した工業都市と工場のなかで、季節や天候にかかわりのない時間制のもとで、労働者は、機械を操作しつつ無生物ないし無機物から商品を加工する。人間は機械の威力を介して、またさらにそれを獲得するために、一方では生態的自然的領分を破壊的に排除し、他方では人工的な環境を思うまま投機的に構築しつつ、地球の物質・エネルギー界を機械技術的に領有しはじめるにいたったのである。

(四) 第二次産業革命——電気の実用化と化学工業の勃興によつて主導された、一九世紀末からはじまる産業革新は、第二次産業革命ともよばれている。電気は、それを動力源とする電動機として蒸気機関にとつて替わつただけではない。火力から電力への転換は人類文明史における未曾有のエネルギー革命なのである。電気は火力、水力、風力、原子力などから等しくひきだされる均質のエネルギーであるばかりでなく、動力、熱、光、電波などに変換

されうる汎用エネルギーでもあり、したがって、工場の産業用にだけでなく一般家庭の生活用に送電・配電される。このように驚くべき普遍的なエネルギーとして、電気は直接に人間の生活様式全般を激変させることになった。今日では自明のように、われわれは電気エネルギーと多種多様な電気器具にとりかこまれて生活しており、夜の地球は電気エネルギーで光る惑星となっているほどである。ところで、他方、エネルギー材として産業革命になった石炭、その乾溜によって生じるコールタール——やがてさらに石油や天然ガス——は、化学的に分子レヴェルで処理されることによつて、合成繊維、合成ゴム、合成樹脂といった原料素材へ転換されるようになり、化学工業とりわけ合成化学工業の発展をもたらした。天然素材から人工的な合成素材へのこうした開発的な移行は、ちょうど新石器革命期における野生の動植物から育成される動植物への移行と類比的であるといえよう。後者が生ける生物の生態、性質、効用などにかんする知識・技術的な精通と統御の能力によつて達成されたように、前者は、物質の化学的組成の構造や性質を知識・技術的に確定し、抽出・合成しうるようになったことに基づくからである。このように、人間はいまや、その工業的な生活世界として開拓した物質・エネルギー界を分子や電子——やがてはさらに原子核や中性子——のレヴェルで領有するまでになっている。しかし、同時に致命的にも、自然の生態的・物質的な循環過程にくみこまれえない非自然的な物質を産出し排出することによつて、地球を構成するエレメントそのもの(大地、水圏、大気圏、気温など)の汚染と破壊をひき起こしはじめたのである。

(五) 情報化時代——小型化された大容量かつ高速のコンピュータの普及、情報科学や電気通信の理論・技術的な発展、それらにささえられて高度化した情報の処理・伝送は、それ自身が先端的に産業化されたばかりではない。まさにそのことによつて、他の諸産業を情報化し、さらに社会生活一般にまで急速に浸透しはじめている。電力が汎用エネルギー(いわば multienergy)として、社会生活全般にゆきわたったように、それぞれに固有の方式で伝達

されていた音声、文字、画像などがすべて統合的に汎用的なデジタル信号(multimedia)に変換され、企業や諸機関から個人にいたるさまざまなレベルでネットワーク、さらにインターネットが構築され、そうした通信統合網が社会経済的な基盤として整備されようとしている。このように、人間の神経系を地球規模の電子的な通信網として人間間的に外在的することによって、人間の社会的関係の基軸であるコミュニケーションが極大化され、瞬時化されるにいたった。つまり、相互人間的な生活世界としての情報通信圏が、普遍的なメタ構造の水準で——というのも、音声言語も文字言語もすべてデジタル信号に変換処理され、またネットワークのネットワークたるインターネットに伝送されるのだから——領有されたのである。始まったばかりの事態を遠くまで見とおすことはむずかしいにしても、人間の機能系の外在化と生活世界の領有化との相関的・段階的な進展という観点からみれば、情報革命と喧伝されることにも、必要十分な論拠を見いだすことができよう。

領有圏と領有様態の脱自然的な動向

以上のように、人間は先史以来、身体の器官・神経的な機能可能性を外化・形成しつつ、それを媒介として一定の生活世界を内化・領有してきた。しかも、そのつど領有されるべき主題領域を生ける動物圏から植物圏へ、さらに無生の物質・エネルギー圏へと転進させてきた。そして、自己外化と世界内化の相互昂進的な労働をつうじて、高度に獲得された知識・技術によって、人間はいまや、*homo loquens* および *homo sapiens* としての相互人間関係の基盤である情報通信圏を——もちろん情報工学的な形式においてのかぎりで——領有するにいたったのである。また、世界領有の——生物学的、物理・化学的、工学的と称しうるような——それぞれの段階において、野生種から育成種へ、天然素材から合成素材へ、火力から電力へ、アナログ方式からデジタル方式へとその領有様態

人間の転換の本質について

を転換させてきた、ということにも注目しなければならぬ。そこではつねに、対象に対するより高度の統御可能性をめざして、自然にそくした領有方法から人工的に開発された領有技術へむかう動向が、高進的に反復されている。ここからふり返れば、そうした脱自然的な動向は、生活世界の文明的領有の進展全体をもつらぬいていることが分かる。動物圏から植物圏、物質・エネルギー圏、情報圏へとむかう産業的な領有化の革新段階——それは共時的には、第一次産業、第二次産業、第三次産業と分かれたれる産業階層におおよそ対応する——は、野生動物の生命性 (vitality) から工業生産物 (たとえば鉄製品) の物質的実在性 (reality) をへて、電脳的情報の想念的虚在性 (virtuality) にいたるそれぞれの里程を画している。したがって、それは、人間および環境世界の野生的な生命性から遊離し、物質的な実在性を捨象していく過程なのである。それは、生物進化から文明進化へ転位した人間に——カインのしるしのように——刻印された文明性の動向、その文明性に固執し拘束されているかぎりでの宿命的な動向性格である、というべきであろう。

文明批判の諸可能性

ところで、文明は、それ自身に固有の人間学的な定向的必然性にそくして展開されるとはいえ、また、その展開過程ではそれ自身の目的合理性にしたがって——つまり、一定の目的のために投入される資金や労力と達成される効用や効率にかんする合理的な算定にしたがって——、さまざまな企図を評価し淘汰するとはいえ、それ自身だけで自律的に進展し完結するような独立した系などではありえない。文明とはもともと、人間が対自然のおよび対社会的な二重の関係のうちにあつて、自然環境を領有するために機関・装置として制作し (teknein)、社会生活を統制するために機構・制度として制定する (poiein) 客体的な機能存立態、つまりはテクネー (technē) とノモス (nomos)

の組織的な機能総体である（したがって、文明にかんする本稿の主題的な記述は、前者の側面に制限されていたことになる）。すでにギリシアにおいてテクネーとピュシス（*techné*）、ノモスとピュシスがともに相反概念として並称されたように、文明はその始まりからして、生活環境の自然性と人間社会の自然性に対する領有・統御の態度に発し、それを貫徹してきたのである。したがって、文明の進展過程のうちには内的に必然的な定向性ととも、つねに同時に潜在的あるいは顕在的に、環境や人間の自然性から浸出する逆行性（*adversité*）——逆境にさらされつつ抵抗する動向——がはらまれていく。文明の葛藤、不快、抑圧がくりかえし歎ぜられ、へ自然に従え、へ自然に還れ、がくりかえし標榜されるゆえんである。こうして、今日では地球をおおうまでになった文明帝国主義——人間のメタ機能とプロ機能のあくなき高進と拡大、その一次元的な合理性の貫徹によって非合理性に反転した超力——に対して、自然環境の生態性の観点からの批判、社会哲学的な観点からの批判が先鋭化したのである。これらの文明批判は、相補的かつ連带的に遂行されなければならない。文明における人間の疎外的形成は、同時に相関的に、自然の疎外的形成でもあり、また——ホルクハイマーの根本テーゼ⁽⁹⁾を想起すれば——、自然に対する人間の支配の歴史は、同時に人間に対する人間の支配の歴史でもあるのだからである。

文明と文化はあるいは区別され、あるいは同視されるが、それは、たとえばドイツとフランスにおける近代の社会階層史の相違に由来してもいる。しかし、ここでは人間学的な現象性にそくして、また批判的な意図にもとづいて、つぎのように簡明に区別しておくことにしよう。文明（*civilisation*）は、都市（*civitas*）に典型的な集合的な功利生活において需要供給される共通の実用価値（有用性、快適性）を志向するが、文化（*culture*）は、農耕生活（*agri-cultura*）に根ざした育成エートスによる個人の人間の形成、精神の自己実現としての目的価値（真、善、美）を志向する。したがってまた、ヘーゲルによる精神の区別にかさねれば、文明はテクネーとノモスに客体化された

客観的精神であり、文化は、哲学的思惟や宗教的開悟や芸術的表現のうち自己を形成し把握する絶対的精神である、ということもできよう。そうだとすれば、人間の文明的な実現(Realisation)は、なにかのために自己を疎外する自己物象化(veification)であり、文化的な実現は、なにかのためでもなく自己が個性的に成熟する自己現実態(entelequia)であることになる。文化はそうした自己性の核心に、カントが人間の社会史および個人史における革命的な課題とした啓蒙、〈自ら思考すること(Selbstdenken)〉という格率をになつていなければならぬ。こうして、個人の文化意識は、自己のエンテレキアへの意志と自ら思惟する批判的理性によつて、世界をおおう集合的価値とその物象的实现に抗する自立的な抵抗点、文明批判の最終的な個人規点となりうるのである。

文明進化はその活動をしだいに加速的に激発させることによつて、いわゆる過大進化に陥つてゐる、といえるかもしれない。そのために一方では、文明以前の、そして文明によつて領有的に統合されながら文明のうちなる逆行性となつた、自然的・生態的な生命生活が強度に抑圧され、広範に破壊されるまでになつてゐる。あるいは、価値実現の活動において拮抗し協合しあいながらも、文化価値こそがその高さによつて文明価値を統合すべきであるにもかかわらず、文化産業とよばれる事態に示されるように、後者が前者を圧倒的なまでに呑みこんでしまつてゐる。そして他方では、文明を超出する人間のさらに高次の開放的な可能性が、まったくなきがごとくに閉塞されてゐるのである。それゆゑ、文明はさらに、そしてなによりも、世界開放的な活動への強迫的なヒュブリスと存在開放性へのまつたき盲目にかんして開放論的に批判されなければならないであろう。

第三の直立革命としての存在開放性

そうした高次の開放可能性は一義的に定まつてゐるわけではない。ここでは論脈にかかわるかぎり、その根本

方向をきわだたせておくにとどめよう。まず直観的な形像によつて示唆しうるとすれば、それは、日本の仏像によつてふかい真正さにおいて表現されてきたように思われる。静謐に直立するその立像と坐像は、無念、無言、無為——達磨像ではとりわけ絶言絶慮、四肢坐断——の境地を、したがつて homo sapiens、homo loquens、homo faber の放さないし脱落による homo stans への帰真を啓示している。それはまた、エッソハルトの神秘的思弁によつて、端的な立つこと (stehen) として、さらに充分にいえば、離脱や放下において立つこと、純粹に不動に立つこと、無において立つこととして、つねに突破的な迫真によつて示されている。そこには、人間の超脱的・神秘的な実存そのものの直立革命というべきものがある。それゆえ、理性的人間の自立としての Selbstdenken にかんするカントの評言、「人間の内面におけるもつとも重大な革命」は、さらに徹底した本来性において、実存の第三の直立について言わなければならぬ。実際、クリシュナムルティも、刻々のいまここに無執着に覚醒してあるがままに在ることを、「ただ一つの革命 (the only revolution)」——革命という語にあたいするただ一つの真の革命——と称するのである。ちなみに、re-volutio という語が回帰しつゝ転換することを意味するということ、また、生命の系統的な体制の根本転換は、いまだ特殊化していない原始型ないし幼型にたち還ることによつてなしとげられるということに注意しておこう。そうだとすれば、人間の本来の革命は、文明的な諸特質のさらなる発展や飛躍ではなく、それらを支えつつもそれ自身は背後にひかえている直立位への回帰可能性にかかっていることになる。人間の天命というべき直立性が、身体におけるその原型から自立的な精神、離立的実存へと高進的・回帰的に革新されるのである。こうして、人間はその最初の出身において homo stans といわれるだけでなく、最後の存在開放性——それが人間のふだんの entelecheia である——においてまさに homo stans になるのである。そのとき、いまここになぜなしに立つ存在、万象のただなかに全開された無心の覚醒、刻々の無常に洗われている淨息として、homo stans は nunc stans

に帰一していることであらう。

註

- (1) A. Leroi-Gourhan: *Le geste et la parole*, 1964-5, 荒木幸訳『身と口の言葉』(新潮社) 二八頁。
 - (2) I. Kant: *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*. Immanuel Kants Werke, Bd. VIII, hrsg. v. E. Cassirer, S. 118; 山下坂部訳『人間学』『カント全集 第十四巻』(理想社) 一八四頁。
 - (3) 感覚を第一次的な所与として想定する経験論的および観念論的な感覚論哲学——後者にはカント(感覚の質料的多様)やフッサール(感覚的ヒューレ)が属している——は、まずは断固として斥けておかなければならない。そのことが、知覚や世界の原現象性を確保するための試金石となるからである。それゆえに、メルローポンティも一度ならず、「地のうへの図」がわれわれの取得しようとする最も単純な感覚的所与である」と強調するのである (*Phänomenologie de la perception*, p. 10; cf. *Le visible et l'invisible*, p. 245, 246)。
- ここではしかし、当該の趣旨に即ちそう関連する感覚理解について、シェラーを参照しておこう。——「さまざまな種における(感覚)性質の範囲がそれらの種に与えられるのは、そうした性質の範囲がアルファベットとして呈示され、それによって環境事物のいわば今生ける語が表示可能になるかぎりにおいてである。……感覚性質もまた、環境世界という大いなる(詩)を成り立たせる〈要素〉を呈示している。しかし、……〈感覚〉が〈与えられる〉というふうな者には、世界は、それらにか世界のものも与えられていない、というよりもまた確かである」(*Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertlehre*. Gesammelte Werke, Bd. 2, S. 163)。
- 「知覚——それはもともと……積極的な活動よりも否定的、批判的な活動の方向の概念にすぎない。……きわめて確かなことは……人間が動物よりも、成人が子供よりも、男性が女性よりも個人が集合体のたんなる〈成員〉よりも〈理念的な〉像知覚に近づいている」ということである」(*Ethik und Arbeit*. Gesammelte Werke, Bd. 8, S. 315)。
- シェラーの感覚批判の文脈にあわせれば、このでの〈知覚〉および〈像知覚〉は〈感覚〉として読みかえらるべきである。

それゆえ、感覚は一方では、知覚にかなする反省的分析や実験心理学による解体現象であるとしても、他方では、現象の理念的形成の一般動向に根ざして成立した、より客観的より抽象的な、しかしそれなりの現象性格を有するものとして認めることもできよう。そうだとすれば、前者はまったく恣意的というわけではなく、おそらくは後者に動機づけられているだろう。そして実際にも、客観的な音階や色階の組織が形成されており、たとえば音高、音価、音色などをそれぞれに聴き分ける音感や、そのほか色感や味感などを専門的に訓練し、開発することさえできるのである。

ところで、当該の観点からすれば、さらに遠くまで進むことができる。というのも、事物知覚への生活関心から解放された、より高次の美的 (aesthetic) ないし神秘的な意識にとつては、色や音そのものの純粹な感覚 (sensations) を主題的かつ積極的に享受し、表現しうるようになるからである。そのさいには、感覚は文字どおり世界の詩的、神秘的な様相として現象し、たとえばクリシュナムルティ (Krishnamurti's notebook, p. 188) や「碧嶽録」(第七十九則) によって証示されるように、色や音も神性あるいは仏性として感得されるようになるのである。それが——さきの音感や色感の専門性と同じように——二次的にして高次であるのは、音素の発見や体系記述、素材の抽出や開発がそうであるのと同様である。いずれにおいても、第一次的な対象志向から解放されることによつて、さらにプロ機能の潜在的な層を主題的に発見し、積極的に開発しなければならぬからである。

(4) Aristoteles: *De anima*, 432a2. —「手は諸道具の道具である (ἡ χεὶρ ὄργανον ἔστιν ὄργανον)」。

(5) L.A. Feuerbach: *Das Wesen des Christentums*. Gesamtnelle Werke 5, S. 48-9, 71; 船山信一訳「キリスト教の本質」(岩波書店) 上六九、九八頁。——「神の本質とは……個体的人間の制限から純化され解放された、対象化された (verobjektiviert) 人間の本質に……ほかならぬ」。

(6) 機具から機械へ移行するさいの媒介形態として、人力を動物や風水の力に代替させる機関装置(馬車、風車、水車など)が成
立していた。

(7) A. Leroi-Gourhan: *Les religions de la Préhistoire*, 1964; 蔵持不二世訳「先史時代の宗教と芸術」(日本エディタースク
ル出版部) 九四—一六頁。

(8) 汎用素材としての鉄(鉄は、いわゆる鉄器時代にかぎらず産業革命期から現代にいたるまで、ファイイン・セラミックスなどの開発にもかかわらず、強度と延性をかねそなえた最もすぐれた素材でありつづけている)、汎用エネルギーとしての電気、汎用信号としてのデジタル信号——このように、プロ機能体においては、汎用性の発見と形成が文明の普遍的な基盤、水準、人間の転換の本質について

時代を決定するものとなる。

- (9) M. Horkheimer: *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft*. Gesammelte Schriften, Bd. 6, S. 116. 出口祐弘訳「理性の腐蝕」(せりか書房)、『二七頁』——「自然を征服しようとする人間の努力の歴史は、人間による人間の征服の歴史でもある」。
- (10) Meister Eckhart: *Die rede der underschünunge: Von abegeschidenheit*. Deutsche Werke, Bd. 5, S. 279 (S. 530), S. 411 (S. 541) etc. ——「われわれは……無に在りて在る (wir……an nite stän blihen)」。「そのうちにまじったとき離脱のうちに立(た)て(た)人間 (der mensche, der also stät in ganzer abegeschidenheit)」。
- (11) J. Krishnamurti: *The only revolution*, ed. by M. Lutyens, 1977.

(付記)

本稿は、第八回日本学術会議哲学系公開シンポジウム「転換期における人間」(平成一〇年二月八日)にさいして発表された原稿であり、さらに敷衍するために加筆されている。与えられた課題に対して、シンポジウムの表題の語句と趣意をそれぞれいらか反転させることによって、責めをふさいだものである。技術論と文明論にかんする具体事例については、素人の知識のやりくりで恥ずかしいが、人間学的考察のありうべき適用の一例として看過していただきたい。

(しのけんじ・東北大学文学部教授)